

# 高等学校「古典探究（Advanced Classics）」における 探究的な学びの深化に関する研究

——「若紫」における視線・顔認識・フランス語訳・映像テキストをめぐって——

高橋正人

要旨：新学習指導要領の告示を受け、「育成を目指す資質・能力の明確化」及び「主体的・対話的で深い学び（proactive, interactive, and authentic learning）」が求められ、「言葉による見方・考え方（Approaches）」を働かせた質の高い学びが高等学校国語においても求められている。本研究は、選択科目「古典探究」において深い学びを実現するために、高等学校国語教材『源氏物語』『若紫』を中心に垣間見や話型及び視線の問題及び顔認識などについて考察を加えるとともに、フランス語訳との比較や映像テキストなどを用いた探究活動を通して、作品世界における〈重ね構造〉について考究し、古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成の方途を探ることを目的とする。

【キーワード】 探究 〈重ね構造〉 〈形代〉 〈顔認識〉 〈世界〉 の発見 視線の持つ多重性・多層性

## 1 はじめに

### ～「探究」という手法の持つ意味～

新学習指導要領において科目名として「探究」が冠されているものとしては、「地理探究（Advanced Geography）」「日本史探究（Advanced Japanese History）」「世界史探究（Advanced World History）」「理数探究基礎（Basic Inquiry-Based Study of Science and Mathematics）」「理数探究（Inquiry-Based Study of Science and Mathematics）」「総合的な探究の時間（Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study）」が挙げられ、「古典探究（Advanced Classics）」も探究を中心とする学びの系統に位置付けられる。

また、今次改訂においては、文部科学省（2019a：252-253）における「エ 古典の作品や文章に表れている、言葉の響きやリズム、修辞などの表現の特色について理解を深めること」について、「表現の特色」に関する解説には次のような指摘がなされている。

表現の特色には、会話体、独白体、起承転結などの文章の構成や展開の仕方のほか、時代を超えて用いられ、あるいは特定の時代、特定の書き手の作品や文章に繰り返し用いられる、「花」、「月」、「死生観」、「恋愛観」、「無常観」など表現の題材や素材となるもの、さらには、「報恩譚」、「変身譚」、「貴種流離譚」、「仙界遊行」などの物語の類型も含まれる。なお、古文における音便や係り結びなどの文法的な現象を理解すること、掛詞や縁語などの様々な修辞法の使用による表現効果について理解を深めること、「花鳥風月」や「雪月花」などがどのように詠じられているかを表現の差異に着目して深く理解すること、さらには物語を類型の視点から分析して表現の特色について理解を深めることは、作品や文章の構成・展開を的確に捉えるためにも重要である。

ここでは、旧解説では言及されていない「貴種流離譚」などの言葉に着目したい。『源氏物語』『須磨』『明石』については、光源氏の准太政天皇への栄達に至る過程の一つとしての「流離」が描かれているとされているが、このような「話型」に言及することは、学習活動をより学術的な世界に向けていくことにつながる活動であるといえる。従来の解説では踏み込んでいない「学術的」な内容がコメントされていることに象徴されるように、高等学校における「探究」活動においては、専門的な知見に基づいた学問的な世界への誘いがなされていることに注目することが重要である。

また、文部科学省（2019a：9）には、「古典を

主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目」との中央教育審議会答申からの指摘を受けて、「古典探究」における学習がより「主体的・対話的で深い学び」に向けた方向に重きを置いていることが分かる。さらに、育成すべき資質・能力を明確にした上で、それを実現するための言語活動例として、「書くこと」においては、小説や詩歌などの創作、批評、心情や情景の書き換え、古典を題材とした小説、翻案作品の創作、グループによる書き継ぎ、共同での作品制作などがあげられている。また、「読むこと」については、次の言語活動例が示されている。

- ア 作品の内容や形式について、書評を書いたり、自分の解釈や見解を基に議論したりする活動。
- イ 作品の内容や形式に対する評価について、評論や解説を参考にしながら、論述したり討論したりする活動。
- ウ 小説を、脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える活動。
- エ 演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して、批評文や紹介文などをまとめる活動。
- オ テーマを立てて詩文を集め、アンソロジーを作成して発表し合い、互いに批評する活動。
- カ 作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動。

表1は、高等学校国語科「古典探究」を含む各科目における「読むこと」に関する言語活動例を「創作系/説明系」「個人的学習/協働的学習」の二軸によって整理・布置したものの一部である。

ここに示されているように、作品の内容や形式に関する書評や、自分の解釈や見解を基にした議論、さらには、評論や解説を参考にしながらの論述や討論などの発信型・交流型の言語活動が組織されていることに着目したい。

さらに、「探究」という観点から考えると、「総合的な探究の時間」との関連も重要である。文部科学省(2019b: 10)には、教科における「探究」と「総合的な探究の時間」との違いについて、右記枠内のように指摘している。

さらに、重要なことは、「総合的な探究の時間」における「質の高い探究」について「質の高い探

表1 高等学校国語科「読むこと」の言語活動例布置

	創作系		
協働的学習	解釈の違いを話し合う 詩歌や芸能について調べる 成果の発表 文章にまとめる 批評する 討論する 解釈の違いについて話し合う アンソロジーの発表 古典の朗読 報告書のまとめ	和歌や俳句への書き換え テーマを立ててまとめる 和歌や俳句の外国語訳 書評 小説の他の形式への書き換え 和歌や俳諧、漢詩の創作 体験などを文語で表現 往来物や漢文の名句・名言を読む 随筆にまとめる	個人的学習
	発表・批評・討論 詩歌の技法などの調査・発表 詩文を集めアンソロジー作成 作品に関連のある事柄の調査 興味をもったことや疑問を調査・発表・議論 共通点や相違点について論述・発表・朗読	引用・要約・論述・批評 複数の文章についての解釈 書き換えや比較 異なる時代の物語などの読み比べ 関連資料を比較して論述 演劇や映画の作品と基になった作品との比較 同じ題材を取り上げた複数の古典の読み比べ	
	説明系		

総合的な探究の時間は、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する事象を対象としている。二つは、複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究するという点である。他の探究が、他教科・科目における理解をより深めることを目的に行われていることに対し、総合的な探究の時間では、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を様々な角度から俯瞰して捉え、考えていく。そして三つは、この時間における学習活動が、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視しているという点である。なお、実社会や実生活における課題を探究する総合的な探究の時間と、教科の系統の中で行われる探究の両方が教育課程上しっかりと位置付き、それぞれが充実することが豊かな教育課程の実現につながると考えられる。

究とは、次の二つで考えることができる。一つは、探究の過程が高度化するという点である。高度化とは、① 探究において目的と解決の方法に矛盾がない(整合性)、② 探究において適切に資質・能力を活用している(効果性)、③ 焦点化し深く掘り下げて探究している(鋭角性)、④ 幅広い可能性を視野に入れながら探究している(広角性)などの姿で捉えることができる。もう一つは、探

究が自律的に行われるということである。具体的には、① 自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）、② 探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、③ 得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）などの姿で捉えることができる」という指摘である。こうした、「探究における生徒の学習の姿」について、文部科学省（2019b：12）では、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」という一連の流れを示しているが、浜本監修・幸田編（2020：15-16）は、「探究のプロセスの要諦は、一方向の一回性ではなく、『行きつ戻りつ』しながらこれらが繰り返されることにある」と指摘し、カナダ・アルバータ州の指導書の「Inquiry Model 略図」（図1）を参考として示しており示唆的である。

こうした探究的な学びの「可逆性」に着目するとともに、インプット（input）とアウトプット（output）との往還及びそれらをモニタリングしコントロールする学習過程は今後さらに重要性を増すものと考えられる。

なお、以下、本稿における『源氏物語』の引用については、阿部・秋山・今井校注『新編日本古典文学全集』をする。

■ Inquiry Model 略図

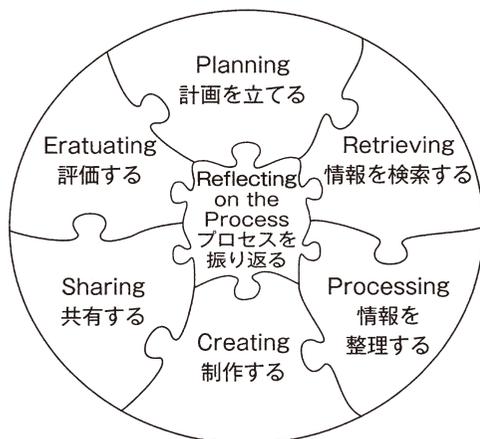


図1 浜本純逸監修・幸田国広編（2020：16）『探究学習』より

## 2 『源氏物語』「若紫」における探究的活動 ～〈重ね構造〉〈形代〉〈顔認識〉～

「古典探究」における探究的な学びを深めるための過程としては、次の過程が考えられる。

- ① 課題となる〈問い〉の生成
- ② 〈問い〉に対する従来の見解の確認
- ③ 〈問い〉を解決するための方法の確認
- ④ 〈問い〉を解決する思考
- ⑤ 〈問い〉と答えに関する検証

このようなプロセスを経て、〈問い〉をもとにした探究活動を進め、思考を深めることが重要であるが、『源氏物語』に関する探究に関連して、高橋・久保編（1995）において項立てされている「主題」、「方法」、「歴史」、「表現」、「〈衣〉」、「視点」、「美術」、「物語秀歌撰」などの複数のテーマ群は探究活動を進める上でも示唆的である。

本稿では、「見る」ことに関連して、① 垣間見に関する認知方法、② 外国語訳、とりわけフランス語訳との対比、③ 絵画における表現を視座に据えて、考察を加えていく。特に、作品世界における事象に包含される複数の事物の重なりが構造的に機能している〈重ね構造〉に着目したい。北山で初めて若紫と出会った光源氏の視覚的認識において、対象である少女の眉目あるいは行動・所作に惹き付けられるばかりではなく、対象としての少女の面差しを含め、そこに禁忌の対象でありながら引き寄せられている藤壺の姿を透視し、さらには、藤壺という対象を介して死別した母・桐壺更衣を幻視するという多層構造が看取される。さらに、相似性を認知した視線と並行して対象である若紫の現在時点での像に、成長という時間軸の中での複数の像をも想起している。つまり、過去から現在、そして、未来へと行き来する運動を引き起こす構造体として〈重ね構造〉が機能している。なお、〈重ね構造〉の外延としては、『日本国語大辞典 第二版』（2009）「重・襲」の語義「重ねたもの、衣服を重ねて着るときの、衣と衣との配色」等を受けつつ、和歌における引き歌や先行作品の広義の引用、形代にみられる相貌に関する

相似の問題、さらには、現在の時点を見ながら過去や未来に視点を移動する場合に見られるような時間における重層構造や視覚と聴覚との相互乗り入れに関する相互浸透などを想定している。併せて、本文に関する後人の手になる注釈も一人意味での〈重ね構造〉として包括して捉えることが可能である。特に、視覚については、対象を〈見る〉ことが、単に現在の時点での視覚情報の補足に留まらず、対象の認識を通して、対象にまつわるあらゆる事象を包含した〈ゆかり〉をも想起させ、時間軸においても現在、過去、未来という重なりを想起させる構造そのものが想定される。併せて、〈重ね構造〉に関連して、藤井(2004: 137-138)が、物語人称について、「語り手の語り」がさらにそこ(主人公についての語り=三人称叙述と、その人物そのひとの視線=一人称叙述: 稿者注)に“かさなって”いる」と指摘しており示唆的である。図2は、対象としての若紫に向けられた光源氏の視線に関する〈重ね構造〉を例として、第I層、第II層、第III層の構造体についてのイメージ図である。

こうした、〈重ね構造〉については、例えば視覚に関しては、透過性、透明性、明暗、部分と全

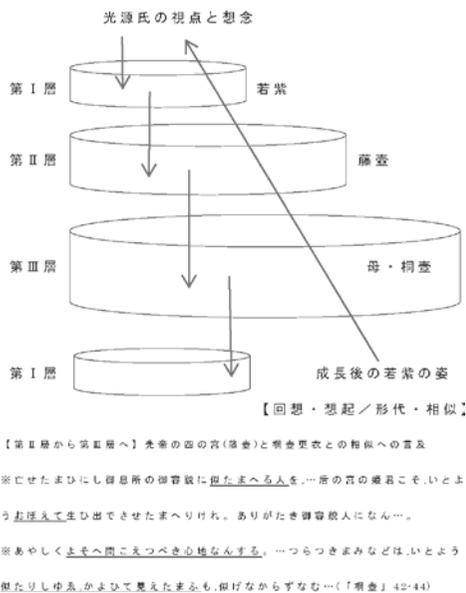


図2 若紫に係る〈重ね構造〉についてのイメージ図

体、他の感覚との干渉、動作の有無、衣裳、シルエット、色彩、形態、判別、拡大・縮小、遠近法など様々な観点から考察することができる。その中でも、「透かし見る」ことは視線の動きとともに、視線の出発地点と到達、回帰という一連の運動とも関係している。

「若紫」については、『源氏物語』の中でも重要な役割を有している巻であり、工藤(2012: 76)は、図3に示す系図によって落窪の姫君の境遇との類似性を指摘しているが、このような系図によって物語の構造を見ることも探究の端緒となる。

石田・清水(1982: 182)は、『源氏物語一』において、「巻名の「若紫」は、『伊勢物語』初段の歌「春日野の若紫の摺衣しのぶの乱れ限り知られず」によっており、この巻のはじめの、源氏が北山で少女を見そめる垣間見のくだりは、『伊勢物語』の初段にその想を借りている。「若紫」とは、春、萌え出た紫草。紫草は、この巻では、藤の花の色の縁で、藤壺その人を意味し、若紫とは、その藤壺の姪でしかも藤壺に生き写しの少女を意味する」と指摘している。なお、「若紫」と『伊勢

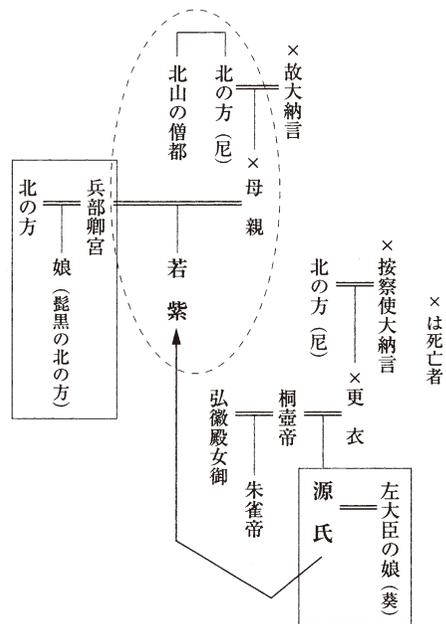


図3 工藤重矩(2012: 76)『源氏物語の結婚』より

物語』初段との関連性については、藤本他(2011: 337-339)が①主体②主体の状態③場所④容体⑤物語の展開という構造的類似関係について分析しているが、視線の問題については、「若紫」における重層性がより深いと考えられる。

「若紫」における「垣間見」については、光源氏の生涯にわたって生を共にする人物・紫の上の発見の場面であるとともに、藤壺との関係が顕在化するという極めて作品の太い幹であり、軸となる出来事でもある。『源氏物語』における垣間見については、林田・原岡他編(2002: 115)は、「野分」「若菜下」「橋姫」における垣間見を瞥見するとともに、「若紫」における紫の上垣間見について、「登場人物の視線を語り手と一体化し、動的な視線のドラマを生み出した点で先行物語と一線を画し、[…]この垣間見が恋の発端にとどまらず紫のゆかりの問題と関わることを明示」していると指摘している。空間と時間という観点から考えたとき、物語の底流には視線の多重性を見ることの時間性・空間性が複合的に重なっている構造を捉えることができる。空間的な遠近法だけでなく、時間及び心理の遠近法とも呼ぶことができる認知の在り方がここには存在する。

具体的に「見る」という動詞を中心に本文を読んでいくと、

- ① (惟光朝臣と)のぞきたまへば、…
- ② (ただ人と)見えず。
- ③ (あはれに)見たまふ。
- ④ (いみじく生ひ先)見えて…
- ⑤ (すこしおぼえたところあれば、子なめりと)見たまふ。
- ⑥ (ねびゆかむさまゆかしき人かなと、)目とまりたまふ。
- ⑦ (いとよう似たてまつれるが、)まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。
- ⑧ (いみじく泣くを)見たまふも、すずろに悲し。
- ⑨ (あはれなる人を)見つるかな、
- ⑩ (よくさるまじき人をも)見つくるなりけり、

⑪ (かく思ひの外なることを)見るよ、と、をかしう思す。

⑫ (さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも)見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

などの表現をあげることができる。柳井他編(1999)『源氏物語索引 新日本古典文学大系別巻』によれば、「見る」の用例は、「若紫」において12か所挙げられている。また、「見」については38か所挙げられている。着目すべきことは、「見る」ことが「見ている」時点での認識だけでなく、現在の視界に映じている現象である少女の姿を直視しつつも、二重写しで過去の藤壺を現在の時点でも空間的に他所、つまり、自由に会うことができない不可能性に満ちた空間に存在する女性を今の時点に取り込むという認知方法を取っているということである。映像化する視線によってダブルイメージが形成されるとともに、現に見えている少女の行く末を幻視する働きがここに働いている。語りにおいては、見る主体とは異なる視座に立って描写がなされていくが、そこには人物の視線に映じたものをさらに視線を受け止め、重ねるもう一つの視線が起点を異にしながら見つめるという多重構造が看取される。

少女に向かう視点とともに、藤壺を二重写しにする認知の在り方に関連して、中村・上原編(2016: 238)では、「際立ちに関するもうひとつの捉え方として、認知主体(C)が心の中で何かを想起する際、目立って手がかりとなる点である「参照点(reference point, R)」を経由して、さらに「ターゲット(target, T)」を同定していくという「参照点構造(reference-point construction)」能力に基づく認知様式がある。これを「R/T認知」と呼ぼう」との指摘があり垣間見場面に関して示唆的である。同書(239)では、この認知に二つの心的段階を想定しており、第一段階は認知主体(conceptualizer, C)が参照点(R)に心的接触し、参照点が焦点化される段階であり、第二段階は、参照点によって形成されたアクセス可能な集合体

(ドミニオン: dominion, D)の中から次に目立つ一つのターゲットに心的接触し, 焦点化される過程である。なお, 参照点構造は図4のように示されており, 「若紫」に即して考えると, Cを光源氏, Rを若紫に, そして, Tを藤壺に見立てることが可能である。

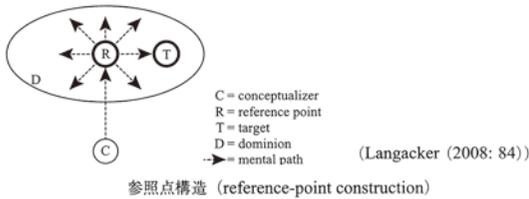


図4 中村芳久・上原聡編 (2016: 239)  
『ラネカーの(間)主観性とその展開』より

なお, 見ることに関する認知構造の特徴について, 「臙化」「焦点化」「仮想」「色彩」「時間」などの観点からまとめたものが表2である。

表2 「見ること」に関する認知構造の特徴

観点	表現
臙化	人なくて, つれづれなれば, 夕暮のいたう霞みたるにまぎれて, かの小柴垣のほどに立ち出でたまふ。
焦点化	人々は帰したまひて, 惟光朝臣とのぞきたまへば, ただこの西面にしも, 持仏すゑたてまつりて行ふ, 尼なりけり。簾すこし上げて, 花奉るめり。中の柱に寄りみて, 脇息の上に経を置きて, いとなやましげに読みみたる尼君, ただ人と見えず。
仮想	四十余ばかりにて, いと白うあてに, 瘦せたれど, つらつきふくらかに, まみのほど, 髪の毛のうつくしげにそがれたる末も, なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかな, とあはれに見たまふ。
色彩	中に, 十ばかりにやあらむと見えて, 白き衣, 山吹などのなえたる着て, 走り来たる女子, [...]
時間	走り来たる女子, あまた見えつる子どもに似るべうもあらず, いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。 ねびゆかむさまゆかしき人かな, と目とまりたまふ。さるは, 限りなう心を尽くしきこゆる人に, いとよう似たてまつれるが, まもらるるなりけり, と思ふにも涙ぞ落つる。

これらに見られるように, 「見ること」の持つ重層性・複合性は「若紫」のみならず, 『源氏物語』における認知構造を理解する上で重要である。

また, 見ることについては, 場面からのアプローチ, つまり, 遠近, 高低, 傾斜, 離脱, 深度, 順序, 焦点, 飛躍, 継起, さらに, 遮断, 省筆性, 臙化による浸透性, 透明性, 直截性, 迂回性, 秘匿, 回避など, 視線の機能面からのアプローチも可能である。併せて, 中山 (1992: 151) は, 「仏訳源氏物語—われわれを映し出す鏡—」において, 「われわれは, フランス語独自の論理に貫かれた仏訳との対比によって, 『源氏物語』 言文独特の味わいの元を確かめることができる。[...] 仏訳は物語世界のすべてを言表表現の側にもってゆき, 一切の情報をそこで完備させ, 整合させる。場面描写の客観性, 作中人物の心理分析の明晰さという特質がそこに生まれる」と指摘し, ルネ・シフェールのフランス語訳は, 「わが『源氏物語』 にとっての他者であり, お互いの姿を映し出す鏡である (同書 153)」と指摘している。次頁表3は「見ることの機能と表現」という観点から, 本文とルネ・シフェールによるフランス語訳『源氏物語』 (*Le Dit du Genji*: 2007) を併記し, 〈視線〉及び〈面影〉に関連する表現に下線を付したものである。

「若紫」における紫上の〈発見〉の場面において重要なことは, 視線の持つ多重性・多層性とその空間的・時間的・心理的な広がりである。さらに, 〈発見〉については,

- ① 対象の認知
- ② 対象の観察
- ③ 対象の把握
- ④ 対象の分析
- ⑤ 対象の評価
- ⑥ 対象との関係性の認知
- ⑦ 対象を見る主体への眼差し
- ⑧ 対象を包み込む世界全体への眼差し
- ⑨ 対象を獲得することへの欲望

という多層構造を有している。

なお, 視線と認知に関連して着目したいのは, 「さるは」という言葉である。大野・佐竹・前田編 (2008) 『岩波古語辞典補訂版』には, 「[然るは] 《サルハの約。前の叙述の内容をとりあげて,

表3 見ることの機能と表現

機能	表現
透明性と遮蔽物による遮断 シンクロ性 同時・複数性 俯瞰性 ※ 仏訳：見ることと見られることの対比	人なくて、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のほどに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にも、持仏すゑまでまつりて行ふ、尼なりけり。[…] La journée était longue et, comme il était désœuvré, il mit à profit la brume dense du crépuscule pour aller, <u>sans être vu</u> , du côté de la haie vive, là-bas. Il avait renvoyé ses gens, et avec Korémitsu no Ason il <u>jeta un coup d'œil à la dérobée</u> : juste devant lui, dans la pièce qui donnait à l'ouest, l'on avait dévotement dressé un bouddha et, faisant ses dévotions, il y avait là une nonne.
透明・透視度 遠望・遠距離 観察・解釈 ※ 仏訳：相似形／非相似形への言及	中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みあたる尼君、ただ人と見えず。 Assise tout contre le pilier central, un rouleau des Écritures posé sur un accoudoir, cette dame nonne qui lisait, l'air tout soucieux, <u>ne semblait être une personne du commun</u> .
視線解釈 遠望／近望 走りへの視線 走査 女の顔への焦点化 他者との比較と相似性 仏訳：特殊性、驚異性への言及	きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえたる着て、走り来たる女子、あまた見えてる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。 Il y avait avec elle deux femmes seulement, proprement vêtues, et puis des fillettes qui entraient et sortaient par jeu ; une enfant était accourue, qui pouvait être dans dixième année, lui sembla-t-il ; vêtue sur une robe blanche d'un surtout jaune corète défraîchi, <u>elle ne ressemblait en rien à toutes celles qu'il avait vues jusque-là ; on devinait la femme qu'elle deviendrait à sa prodigieuse beauté</u> .
髪への焦点化・ピンポイントの視線 ※ 仏訳：大過去形表現	髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。 Sa chevelure déployée en éventail ondulait doucement, et elle se tenait là, <u>le visage tout rouge d'avoir pleuré</u> :
音声吸収と声の連動 心中語 視線の潜伏 ※ 仏訳：相似性言及と相似の雰囲気への言及	「何ごとぞや。童べと腹だちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。 《Que se passe-t-il? Vous vous êtes fâchée avec les petites?》 dit la dame nonne qui leva les yeux et, <u>comme il y avait entre elles un air de ressemblance</u> , il se dit que ce devait être sa fille. — Mon petit moineau, Inuki l'a laissé échapper, celui que je tenais enfermé dans la corbeille», dit l'enfant, l'air dépité.

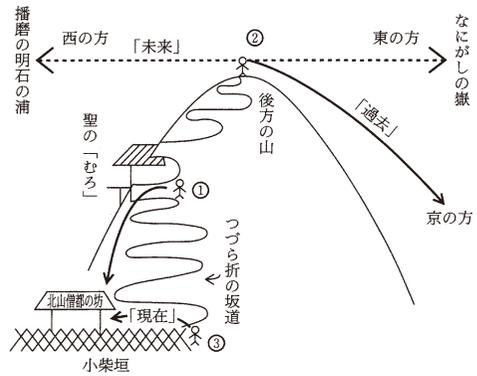
場面離脱 視線滞留 背後の視線 仏訳：半過去形と単純過去による表現	このゐたる大人、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いつ方へかまかりぬる。いとをかしうやうやうなりつるものを。烏などもこそ見つけくれ」とて立ちて行く。 Et l'une des femmes qui se trouvaient là : — Cette écervelée n'en fera jamais d'autres! On a beau la tancer, c'est une étourdie! Où donc s'en est-il allé? Lui qui s'était si gentiment laissé apprivoiser! Et si quelque corbeau le trouvait? dit-elle, et elle sortit.
傷痕 スティグマ 不可逆性 視線の収束 消失点 視線の拡大及び縮小 視線誘因 仏訳：相似性言及 半過去と大過去による時間的差異	つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。 Voici quelqu'un que je serais curieux de voir quand elle aura pris de l'âge! se disait le Prince, qui ne la quittait des yeux. C'est alors qu'il s'avisait qu'elle ressemblait étrangement à celle à qui il avait voué un amour infini : c'était donc cela qui avait attiré ses yeux! songea-t-il, ému aux larmes.
双方向性 他者想像 幼年嵌入 仏訳：主語明示、単純過去 髪への焦点化、付帯表現、視線同化	[...] いみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。 À cette vue, le Prince lui aussi se sentit envahi de tristesse. Malgré son âge si tender, l'enfant cette fois avait écouté avec attention ; elle baissa les yeux, et comme elle inclinait la tête, la chevelure qui retombait sur son visage brilla d'un doux éclat.
記憶・回想 二重性 〈重ね構造〉 内心語表現 仏訳：複合過去形の使用 接続法現在 内心語表現	あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすき者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つけるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見るよと、をかしう思す。 La charmante personne que j'ai aperçue là! Voilà pourquoi nos amateurs d'aventures galantes sont ainsi sans cesse par les chemins : c'est qu'on y découvre des femmes que l'on n'a guère de chances de trouver autrement. Il aura suffi qu'une fois, par hasard, je sorte, pour faire une rencontre à laquelle j'étais loin de m'attendre!
視線による欲望喚起 形代・代替 仏訳：心中 思惟表現 対象への言及と感嘆符	何人ならむ、かの人の御かほりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深くつきぬ。 《Par ma foi, la belle enfant! Qui peut-elle bien être? Je me consolerais certes si, aux lieu et place de la dame de mes pensées, du matin au soir il m'était donné de voir celle-ci!》 songea-t-il encore, et cette idée profondément le pénétra.

その隠れた実情・実態、または他の一面を説明強調する》① それこそ実は。それがまあ。② そのくせ実は。…とはいうものの。実のところ。③ それがしかも。その上」との記述がある。つまり、ここでは、視線と認知、さらには想念が対象を巡る視線の循環という形態をとりながら、「隠れた実情・実態」のヴェールを取り去り、隠れた一面を探り出す視線の存在が浮き彫りになる。そして、視線を投げかけるものと投げかけられるものとの間の水平方向の空間内の動きとともに、人物の内部へと垂錘を降ろしながら潜行する眼差しを基にした〈発見〉を伴うこうした視線の動きは、微細な描写から物語世界の全体にまで広がっていくとともに、空間を超えて時間的な視座をも取り込むこととなる。それが、「かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ」という身代りを求める欲望につながる。さらに、代替を希求する欲望は女三の宮につながる唐猫を手中にした柏木の「恋ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とて鳴く音なるらむ」という歌の「かたみ（形見）」にもつながる。

光源氏の若紫への視線に潜む欲望に関連して、ルネ・ジラル著、古田訳（1981：2）の欲望に関する指摘、すなわち「一見、直線的に見える欲望の上には、主体と対象に同時に光を放射している媒体が存在するのである。こうした三重の関係を表現するにふさわしい立体的な譬喩といえば、あきらかに三角形である。事柄に応じて対象は変わるけれども、こうした三角形は依然として変わることがない」という指摘が想起される。光源氏の若紫への執拗ともいえる欲望と視線には媒体としての藤壺の存在が明らかである。

三田村（1997：29）は、北山における光源氏の視線を図5のように、時空にわたって表現しており、示唆的である。

光源氏の視線は焦点化と拡散化を繰り返す往還運動をすることにより視線の立体化が行われ、直線的な対象把握とともに、空間全体を現在から未来に向けてその射程を広げる。とりわけ注目したのは、将来にわたって紫上の成長を予測すると



光源氏は日の動きに従って、三段階に風景を見る。

- ①小柴垣の家を見おろす。
- ②京の方・はるかな明石の方角を見る。
- ③若紫垣間見。

図5 三田村雅子（1997：29）『源氏物語－物語空間を読む』より

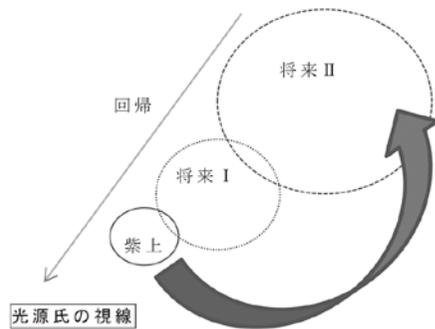


図6 紫上を見る光源氏の多層的な視線

いう〈予期〉する視線が込められていることである。図6は現在に向けられた光源氏の視線が未来を先取りした後に現在に回帰する視線の「三世（過去・現在・未来）」のイメージである。

視線の問題は、顔認識の「相似性」つまり、「紫のゆかり」「おぼえ」にかかわる問題とも密接に関わる。現在の紫上を透視しながら過去の藤壺との密事に回帰する運動を視線は回収するとともに、現在の紫上を成長する存在として「教育」し、自分の思い人の「相似形」を手元においておきたい所有欲につながる視線である。つまり、「若紫」の垣間見における視線は、現在進行中の視線の中

に、過去と未来とに向かって投げかけられる視線が含まれる多重的な視線であると言える。視線に込められた〈透かし〉の技法ともいえるこの視線は、現在を重層化し、現在に流入する時間を含む豊饒な時間を形成する。視線の瞬間に「物語」が発動する契機があり、視線そのものが「物語」を駆動し、新たな「物語」を創出する。なお、神田(2003: 159)は、「若紫は少女であるゆえに性的対象たり得ないし、少女であるゆえにその成長を待つという未来をめぐした時間が自ずとここに敷設されることになる」と指摘している。

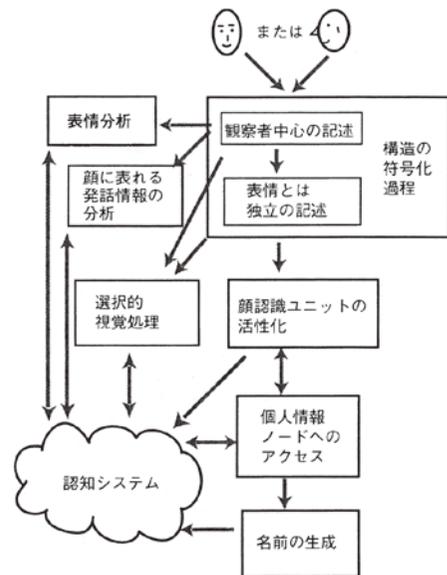
見ることによって対象を把握するとき働く心理は、現在の対象そのものを見るのではなく、対象を〈通して〉、自己の憧れるものを〈透視〉するという〈形代の遠近法〉を形成することとなる。逍遙しながらもその時点その時点で憧れに向かって彷徨う光源氏の視線は、過去・現在・未来を見つめる透徹した〈透視力〉を有している。それはまた、垣間見における〈接近〉と〈離脱〉という身体運動としての物理的な動線とは別に心理的な動線としての〈密着〉と〈執着〉という動きを惹起する。見ることは、こうして静的なものにとどまらず、心理的にも光源氏の動的な運動を内部に胚胎していると言える。

なお、三田村(1996: 222-223)は、形代をめぐって、「形代とは、本来、① 神を祭る時、神霊の代りとして据えたもの、② 陰陽師が、みそぎ・祓などに用いた紙の人形を意味したが、この物語では、転じて本物に擬せられるべきもの、身代りの意で用いられている。[...] 源氏物語の中では、長篇的性格を持つ女性是否応なしに、形代という宿世の中に組みこまれていく。[...] 源氏物語の作者は、ある女性に長篇的契機を付与するために、この形代という思想を積極的にとり入れたとは言えまいか」と指摘し、物語の構造と密接に関わる問題として捉えている。形代とともに、「かよひ」という語もまた、共通性と相違性との関係で重要な語となる。紫の上の素性を知る場面では、「さらば、その子なりけり、と思しあはせつ。親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやと、い

とどあはれに、見まほし」との表現があり、「ここに至って源氏は初めて少女の素性を知り、藤壺に生き写しである理由がわかったのである」との頭注が付されている。阿部(1985: 46)は、「『源氏物語』における「紫のゆかり」の「紫」は藤の色から藤壺の宮の意で、その宮の姪に当る紫の姫君を、その「紫」の「ゆかり」と称したのがはじまりであった」と指摘しているが、このように、類似に関する「形代」「かよひ」「ゆかり」という語のネットワークが形成される。

形代は顔の相似の問題であるが、顔の認識について、井上・佐藤編著(2006: 129)が、Bruce and Young(1986)をもとにした顔認識モデルを図7のように示している。

また、井上・佐藤(2006: 129)は、顔認識モデルの特徴として、「一つは、顔から個人を同定する過程と、その他の情報を認知する過程とは、初期の知覚分析以降の段階では相互に影響せず独



▲ Bruce and Young (1986) の顔認識モデル

構造の符号化過程では、顔の視覚特徴を分析する。選択的視覚処理では性別や年齢、性格の印象など顔から得られるさまざまな属性に関する情報を処理する。その他の特徴については本文参照のこと。

図7 井上毅・佐藤浩一編著(2006: 129)『日常認知の心理学』より

立であることと、もう一つは、個人を同定する過程が、複数の処理段階からなる継時的なプロセス」を経ると指摘している。また、同書(2006: 133)では、顔の再認記憶に影響する要因として、①示差性(distinctiveness)、②既知性、③認識の水準、④加齢、⑤記憶方略を挙げている。示差性とは、顔の目立ちやすさであり、特異性ともいわれるものであり、既知性については、「既知人物の顔では、内部特徴の顕著性(saliency)が高くなり、記憶手がかりになりやす」といわれる(2006: 137)。また、顔の記憶方略については、①示差特徴の走査(顔の各部位に着目して、その顔で最も示差的な部位はどこかを探す方略)、②意味処理(顔を見てその人物の性格印象や好悪、行動特性を判断するという方略)、③既知情報との連合(自分の知っている人物の顔と関連づけながら見るなど知人や有名人の顔との類似性を考えながら見る方略)、④イメージ操作(顔を見たときに、違う表情の視覚イメージを思い浮かべたり別の角度から見た場合の視覚イメージを思い浮かべたりする方略)を挙げている(2006: 138-139)。ここで注目したいのは、③の既知情報との連合である。「若紫」における光源氏の藤壺への思慕は、母・更衣への思慕を基軸としてその変奏とも言うべき祖型をなしているが、広い意味での既知情報をもとに更衣・藤壺との「ゆかり」を追い求め、時間的・空間的・心情的・身体的な接近を図る心情には、視覚方略が底流していると言える。

高橋(2020: 89-90)は、『ごんぎつね』における認知構造について、ごんと兵十との相互認識のドラマを〈発見〉の観点から考察しているが、「兵十だな」(Prenant soin de ne pas se faire voir, Gon se gissa tout doucement dans les herbes profondes et observa l'homme avec attention. “Mais c'est Hyôjû!” se dit-il.)と呼応するように発せられる「ごん、おまえだったのか」(“Oh!” Hyôjû, surpris, baissa les yeux vers Gon. “Gon! Alors, c'était toi? C'était toi qui m'apportais chaque jour des châtaignes? …”)という言葉の持つ意味の重さは、「若紫」における眼差しによる対象の発見におい

て、共通性を看取できる。

なお、吉海(2008: 155)は、垣間見について、「尼君と紫の上という垣間見られる人物設定の特異性、垣間見に伴う聴覚(垣間聞き)の重要性、紅葉賀巻における若紫巻の垣間見場面引用(再現)、垣間見る側と垣間見られる側の情報の相違によるズレなど、従来ほとんど言及されていなかった点がいくつか浮き彫りになってきた」と指摘している。このように、垣間見における視線の問題については、視覚を中心とした多層性が作品の主たる軸として機能していることが分かる。

次に、ルネ・シフェールのフランス語訳で注目したいのは、和歌が五行にわたって訳出されていることである。ヨーロッパでは、ソネット(十四行詩, Sonnet)という定型詩の伝統があり、四行、四行、三行、三行で構成されているが、和歌が五七五七七の五音によって構成されていることを意識していることも一因と考えられる。常田(2014: 73)は、同様の手法をロイヤル・タイラー訳にも見ており、「母音が5・7・5・7・7となるように和歌を翻訳している」と指摘している。併せて、五行に訳出している瀬戸内(1997: 204)の現代語訳を併記する。なお、括弧内の日本語訳は稿者による。

おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露  
ぞ消えむそらなき

Sans qu'elle sache (知ることもなく)

Ce qui pourra advenir (将来どのように成長  
するのか)

De l'herbe jeunette (ごく若い草の)

Faut-il donc que la rosée (淡いバラ色の)

S'évanouisse et la quitte (消え去ってしまう)

どう生い育つことやら

想像もつかない

若草のような幼い姫を

ひとり残して

どうしてわたしは死んでゆけよう

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の  
消えむとすらむ

Tant que ne saura (知りようもなく)

Mûrement épanouie (もうすっかり花咲く)  
 L'herbette si tendre (かくも深い若草が)  
 Comment rosée pourrait-elle (どうしてでき  
 ようか)  
 S'évanouir à jamais (永遠に消えてしまうこ  
 となど)  
 初々しい若草のような  
 姫君の将来も  
 見とどけないままに  
 どうして先だたれるなど  
 お思いになるのでしょうか

このように本文／現代語訳／他の言語による訳をもとに、比較する学習を通して、見方・考え方を深めることも有効な学習となる。その際、叙法（直説法、条件法、命令法、接続法等）、時制（現在、複合過去、半過去、単純過去、大過去、前過去、単純未来、前未来、過去未来等）、態（能動態、受動態）などに着目することにより原文の持つ表現に迫ることが可能となる。

### 3 「若紫」に関する教科書挿絵とマンガ

高等学校古典において、学習者の理解を深める上で挿絵が巻末の古典関連図表などとともに果たす役割は大きい。北原監修（2014：87）は、「絵画の世界では、平安末期に描かれた『源氏物語絵巻』が代表的であり、以後も多くの絵師たちによって描き継がれてきた。同じく視覚的な影響としては、映画化がある。近年でも複数の映画化が行われ、映像を通して絢爛豪華な平安絵巻を感じ取ることができる」と指摘している。

さらに、奥泉（2018：3-4）は、国語科教育におけるヴィジュアル・リテラシーについて、『『多様な背景を持つ人々の思考や感情をより効果的に駆り立てよう』『視覚化』したテキストの学習は、現代の知識基盤社会を背景とした国語科教育において、取り組むべき重要な学習』であると指摘した上で、図8に示すように、文字テキスト、映像テキスト（画像テキストと動画テキストを統合して称する場合）、マルチモーダル・テキスト（映像テキストにキャプションやタイトル等の言葉で

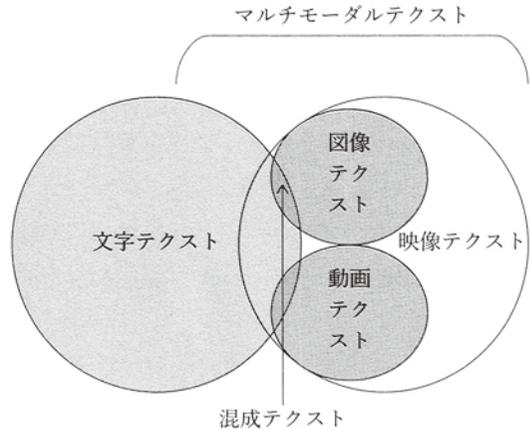


図8 奥泉香（2018：3-4）『国語科教育に求められるヴィジュアル・リテラシーの探究』より

書かれたテキストを統合して扱う場合）、混成型テキスト（マルチモーダル・テキストの内、画像テキストと文章との統合的なテキスト）とカテゴリー化している。

混成型テキストとしてマンガを扱うことは、今後の高等学校国語科においても重要な意義を有するものと思われる。特に、大和和紀『あさきゆめみし』は、『源氏物語』の入門書的位置づけとして広い読者層を持ち、藤本（2008：78）は、源氏物語の世界を知る上で、漫画教材の価値を認めた上で、「おそらく現在、『源氏物語』を総合的に理解する上では、どの訳書にもまして『あさきゆめみし』こそが最良の教科書なのではないかと思う」と指摘している。図9は大和（2008：158）による「若紫」の垣間見の場面である。

なお、原文を含むマンガ化について、山田（2007：247）は、「草子地等は、[…]最新のマンガ化であり、現在連載中の江川達也のものでは、紅葉賀巻から頻出しだす方法で、もとより完全とは言えないけれども、草子地にあたるコマには紫式部の後ろ姿が描かれ、それを表現しようとしていることが窺える。[…]しかし江川のものは、原文を全く省略しないマンガであるので存在し、極端なことを言えば、これが完結した暁には、マンガだけ読んででもかなりなことが言える可能性すらある」と指摘している。江川（2004）は、『源



図9 大和和紀 (2008: 158) 『あさきゆめみし』より

氏物語』を漫画化するにあたって、和歌を五つのコマに表現しており、五七五七七に合わせて言葉と作画を重ねており示唆的である。図10は江川(2004: 33-34)による「若紫」の一部である。



図10 江川達也 (2004: 33-34) 『源氏物語第五巻若紫』より

高等学校教科用図書における「若紫」巻の挿絵作品の使用状況の一部が表4であるが、齋藤・杉山・富田編著(1996: 16-17)は、若紫巻についての概要を説明するとともに、「室町時代成立の、天理図書館蔵「源氏物語絵」や浄土寺蔵の「扇面絵屏風」以来、若紫が雀を追う場面は屋内の縁先

とし、周囲に侍女を描く。しかるに半古が、一見、屋外の庭のように子供一人としたのは新しい構図である。子供の姿態のクローズアップで、光源氏の凝視する強い視線が効果的に印象される。[...]若紫が顔を掩った両手は葉書絵よりも更に可憐である」と指摘している。

図11に示すのは、北原監修(2014: 83)における「若紫(梶田半古)」の挿絵であり、図12は、三角代表著(2013: 133)における「垣間見する光源氏(土佐光吉筆)」の挿絵である。古典作品をめぐるテキストは、本文テキストを基にしながら、様々な受容形態を経ており、ヴィジュアル・リテラシーの観点からも受容の在り方を検討することが探究的な学びを深化する上でも重要である。

なお、次頁以下に示すのは、『源氏物語』「若紫」を素材とした探究的な学びに関する授業構想試案である。

表4 教科用図書における「若紫」巻の挿絵作品例

教科用図書	挿絵作品
木下資一他著(2019)『改訂版古典B古文編』(数研出版)	「源氏物語絵色紙帖・若紫」
中刈正堯・岩崎昇一編(2013)『高等学校古典B古文編』(三省堂)	『源氏物語絵色紙帖』(安土桃山時代長次郎筆)
安斎久美子・中村幸弘他著(2015)『物語・小説評論漢詩・思想史伝』(右文書院)	「小柴垣のほど(承応三年版本)」
三角洋一代表著(2013)『新編古典B』(東京書籍)	「垣間見する光源氏(土佐光吉筆)」
伊井春樹・富永一登他著(2013)『高等学校標準古典B』(第一学習社)	「若紫(狩野永徳筆『源氏物語図屏風』)」
影山輝國・室城英之他著(2013)『古典B古文編』(教育出版)	「古柴垣ごしに西面の部屋をのぞく光源氏と惟光(土佐光吉筆『源氏物語絵色紙』)」
北原保雄代表著(2014)『精選古典』(大修館)	「若紫(梶田半古筆)」



若紫 (梶田半古筆)

図 11 北原保雄監修 (2014: 83) 『精選古典』若紫 (梶田半古) より



垣間見する光源氏 (土佐光吉筆)

図 12 三角洋一代表著 (2013: 133) 『新編古典B』垣間見する光源氏 (土佐光吉筆) より

【授業のねらい】  
『源氏物語』「若紫」に関する眼差しについて着目することにより、作品についての理解を深めるとともに、自分の見方・考え方・感じ方を深める。  
【第一次】「若紫」の読解と垣間見の持つ意味の検討 (2 時間配当)  
・音読及び文法的な理解を踏まえ、場面の理解を進める。  
【第二次】垣間見に関する考察及び共同学習 (2 時間配当)  
・『伊勢物語』など先行する作品の影響や視線に関する論考の考察・共有。  
【第三次】眼差しに関する考察のまとめと口頭発表 (2 時間配当)  
・考察をまとめるとともに、クラス内でのプレゼンテーションを行う。

◇垣間見に関する総合的な探究◇

(第二次, 2 時間目/全 2 時間)

【本時のねらい】  
『源氏物語』「若紫」における垣間見に関わる複合的な視点による考察を加えるとともに、「見ること」の意味を問い直すため、グループによる共同研究を行い、考察の結果をまとめ作品理解を深める。

	学習内容・活動	時	◇指導上の留意点 ◆評価規準
導入	1『源氏物語』「若紫」における垣間見に関する複数論考を踏まえ、グループによる意見交換を通して考えを深める。 垣間見を総合分析する。	5	◇『源氏物語』「若紫」に関する先行研究の成果を共有する。 ◆垣間見の歴史的背景を知る。【知識・技能】
展開	2『源氏物語』「若紫」の垣間見について、多面的・多角的に分析した論考を根拠とともに分析し、グループで精査するとともに、意見交換を行う。 3 各グループにおける内容について相互評価を行う中で、多面的・多角的な見方や考え方を共有し、新たな視座を得る。	40	◇垣間見に関する複数の論考について、どのような視点から分析を行っているかを確認するよう促すとともに、垣間見の持つ新たな意味を考察するよう机間指導する。 ◆各グループにおける考察について妥当性や新規性を検証し、意見交換を基にして作品理解を深める。【思考・判断・表現】
まとめ	4『源氏物語』「若紫」における垣間見に関する考察を通して、見ることの意味を作品全体との関連性について整理する。	5	◆各グループにおける論考の分析の良さを共有する中で、多面的・多角的な見方ができるよう振り返る。【主体的に学習に取り組む態度】
資料	『源氏物語』「若紫」垣間見に関する学術論文及び各種参考図書による論文。併せて、Murasaki Shikibu: THE TALE OF GENJI, PENGUIN CLASSICS DELUXE EDITION, Translated by ROYALL TYLER, UNABRIDGED. 2001. Murasaki-shikibu: Le Dit du Genji, Genji monogatari, traduit du japonais par René Sieffert, illustré par la peinture traditionnelle japonaise du XII <sup>e</sup> au XVII <sup>e</sup> siècle, DIANE DE SELLERS, 2007. などの海外の翻訳も紹介する。		

## 《評価の観点》

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
垣間見に関する論考の分析を通して『源氏物語』における見ることの意味を問い直すことができる。	垣間見に関する多面的・多角的な視点を共有するとともに、論の妥当性について、根拠と理由を基に考察し、説得力を高めることができる。	『源氏物語』に対して複数の考え方や多面的・多角的な視座を得ることにより、作品を深く読むことの意味を再確認し、自論を深化・展開しようとする。

「若紫」における垣間見に関する論考の収集に当たっては、学術論文に関する閲覧ソフトなどを適宜参照するとともに、大学などとの連携も視野に入れて行うこととする。併せて、作品に係る論考の独自性・新規性などを分析した上で、他の作品解釈の汎化可能性を踏まえて幅広く資料の収集に当たる。

なお、指導に当たっては、幅広い観点からの資料の収集の方法、論拠となっている基本的な考えや先行研究の有無について触れるとともに、複数の論考を比較検討及び分析することにより思考の深まりが生まれるよう配慮する。

また、論の視座及び論の展開に関する分析についてグループによるプレゼンテーションを行う活動などを通して、作品に関する理解を深めるとともに、最終的には、作品について自分自身で分析を加え論考をまとめそれらを発表し合う機会を設けることにより、探究的な学びに結びつけることが重要である。

## 4 おわりに

## ～古典と現代との架橋を目指した教材開発～

新科目「古典探究」においては、今後、探究に対する方法意識が重要となる。その際に、学術的な研究を踏まえつつ、古典作品との対話をもとに新たな発見を伴う学びが積み重ねられることが求められる。実践として、武久(2020)において、中学校教材として親しまれている「春はあけぼの」の「あかる」という言葉に着目しつつ、「見方・考え方」を働かせた探究活動を行う例なども見ら

れる。古典を遠いものとして捉えるのではなく、作品との対話を繰り返すことによって新たな価値が生み出されることに着目したい。

さらに、新学習指導要領解説に詳しく述べられているように、最新の学術成果を取り入れながら、古典作品と対峙することによる知的体験の重視が求められる。各自がそれぞれのテーマを持つことにより教科横断的な学際的視座に立った高等学校教育そのものを支える知的基盤を培うこともまた、新しい時代を切り拓く学び手を育てる上で肝要である。

## 《引用・参考文献》

- 青山麻子(2019)『学びを深めるヒントシリーズ 源氏物語』(明治書院)
- 秋山虔・三田村雅子(2003)『源氏物語を読み解く』(小学館)
- 秋山虔(2011)『源氏物語の論』(笠間書院)
- 阿部秋生(1985)『源氏物語の物語論』(岩波書店)
- 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳(1998)『源氏物語⑥』新編日本古典文学全集25(小学館)
- 阿部秋生(1992)『源氏物語』入門』(岩波書店)
- 荒木浩(2014)『かくして「源氏物語」が誕生する。†物語が流動する現場にどう立ち会うか』(笠間書院)
- 石田穰二・清水好子校注(1982)『新潮日本古典集成 源氏物語一』(新潮社)
- 井上毅・佐藤浩一編(2006)『日常認知の心理学』(北大路書房)
- 今井卓爾他編(1992)『源氏物語講座第九巻 近代の享受と海外との交流』(勉誠社)
- 植田恭代(2003)「北山での垣間見」(前田雅之・小嶋菜温子・田中実・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ』[古典編]1] 右文書院)
- 江川達也(2004)『源氏物語第五巻』(集英社)
- 大滝一登編著(2019)『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編 資質・能力を育成する14事例』(明治書院)
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編(2008)『岩波古語辞典改訂版』(岩波書店)
- 沖田吉穂(2007)「ブルーストの古典と『源氏物語』の近代性」(伊井春樹監修『講座源氏物語研究第六巻 近代文学における源氏物語』おうふう)
- 荻原桂子(2017)「文学教材の研究—紫式部『源氏物語』「若紫」の言語表現—」(『九州女子大学紀要』第54巻1号)
- 奥泉香(2018)『国語科教育に求められるヴィジュアル・

リテラシーの探究』（ひつじ書房）

- 角田光代訳（2020）『源氏物語』（河出書房新社）  
 川添房江（2006）『源氏物語時空論』（東京大学出版会）  
 神田龍身（2003）『源氏物語「北山での垣間見」〈幼さ〉の射程』（前田雅之・小嶋菜温子・田中実・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ〔古典編〕1』右文書院）  
 神田龍身（2020）『平安朝物語文学とは何か』—『竹取』『源氏』『狭衣』とエクリチュール—  
 北原保雄監修（2014）『精選古典』（大修館）  
 工藤重矩（2012）『源氏物語の結婚』（中央公論新社）  
 熊野純彦（2020）『源氏物語＝反復と模倣』（作品社）  
 『源氏物語大辞典』編集委員会編（2008）『源氏物語入門』（角川学芸出版）  
 国立教育政策研究所教育課程研究センター著（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 国語】』（東洋館出版社）  
 西郷信綱（1983）『源氏物語を読むために』（平凡社）  
 齋藤慎一・杉山英昭・冨田章編著（1996）『名画で読む源氏物語—梶田半古・近代日本画の魅力』（大修館）  
 島内景二（1989）『源氏物語の話型学』（べりかん社）  
 清水婦久子（2011）『国宝「源氏物語絵巻」を読む』（和泉書院）  
 鈴木奏恵他編（2009）『〈国語教育〉とテキスト論』（ひつじ書房）  
 鈴木日出男（1997）『源氏物語の文章表現』（至文堂）  
 鈴木日出男（2003）『源氏物語虚構論』（東京大学出版会）  
 鈴木日出男（2013）『源氏物語引歌綜覧』（風間書房）  
 鈴木宏昭（2020）『類似と思考 改訂版』（筑摩書房）  
 瀬戸内寂聴（1997）『源氏物語巻一』（講談社）  
 高橋亨・久保朝孝編（1995）『新講 源氏物語を学ぶ人のために』（世界思想社）  
 高橋亨（2007）『源氏物語の詩学』（名古屋大学出版会）  
 高橋正人（2020）『文学はいかに思考力と表現力を深化させるか—福島からの国語科教育モデルと震災時間論』（コールサック社）  
 武久康高（2020）『古典作品を教材とした「深い学び」の実現をめざして—『枕草子』「春はあけぼの」の授業実践—』（『国語教育研究』広島大学国語教育会）  
 常田慎子（2014）『ミシェル・ルヴオンによる『源氏物語』フランス語訳の試み』（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第59巻）  
 角田文衛・加納重文（1944）『源氏物語の地理』（思文閣出版）  
 中野幸一他著（2018）『新探究古典B古文編』（桐原書店）  
 中村芳久・上原聡編（2016）『ラネカーの（間）主観性とその展開』（開拓社）  
 中山真彦（1992）『仏訳源氏物語—われわれを映し出す鏡—』（『源氏物語講座第九巻 近代の享受と海外との交流』

勉誠社）

- 中山真彦（1995）『物語構造論』（岩波書店）  
 浜本純逸監修・幸田国広編（2020）『探究学習—授業実践史をふまえて—』（渓水社）  
 林田孝和・原岡文子他編（2002）『源氏物語辞典』（大和書房）  
 原岡文子（1994）『紫の上の登場—少女の身体を担って—』（『日本文学』第43巻第5号）  
 原岡文子（2008）『「源氏物語」に仕掛けられた謎—「若紫」からのメッセージ』（角川学芸出版）  
 ハルオ・シラネ著、鈴木登美・北村結花訳（1992）『夢の浮橋「源氏物語」の詩学』（中央公論社）  
 東原伸明（2004）『源氏物語の語り・言説・テキスト』（おうふう）  
 藤井貞和（1972）『源氏物語の始原と現在』（三一書房）  
 藤井貞和（2004）『物語理論講義』（東京大学出版会）  
 藤本宗利・角田智則・池田豊教（2011）『『伊勢物語』初段における構造的読解について—『源氏物語』若紫巻との対応を中心として—』（『群馬大学教育実践研究』第28号）  
 藤本由香里（2008）『漫画で読む源氏物語』（『別冊歴読本 源氏物語への招待』新人物往来社）  
 町田守弘（2020）『国語教育を楽しむ』（学文社）  
 三角洋一代表著（2013）『新編古典B』（東京書籍）  
 三田村雅子（1996）『源氏物語 感覚の論理』（有精堂）  
 三田村雅子（1997）『源氏物語—物語空間を読む』（筑摩書房）  
 三田村雅子・河添房江（2006）『描かれた源氏物語』（翰林書房）  
 明治書院編（2014）『高等学校国語科授業実践報告集 古典編II』（明治書院）  
 森一郎（1986）『源氏物語生成論—局面集中と継起的展開—』（世界思想社）  
 森一郎（2000）『源氏物語の表現と人物造型』（和泉書院）  
 文部科学省（2019a）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』（東洋館出版社）  
 文部科学省（2019b）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』（教育図書）  
 柳井滋他編（1999）『源氏物語索引 新日本古典文学大系別巻』（岩波書店）  
 山岸徳平・岡一男監修（1972）『源氏物語講座（全八巻）』（有精堂）  
 山岸徳平（2013）『源氏物語〔全六冊〕』（岩波書店）  
 山田利博（2006）『源氏物語の映像化』（伊井春樹監修『講座源氏物語研究第一巻 源氏物語研究の現在』おうふう）  
 山田利博（2007）『表現の水脈と作品の構造』（伊井春樹監修『講座源氏物語研究第八巻 源氏物語のことばと表現』おうふう）

- 大和和紀 (2008) 『あさきゆめみし完全版 1』 (講談社)
- 吉海直人 (2008) 『「垣間見」る源氏物語 紫式部の手法を解析する』 (笠間書院)
- クロード・ロワ (1999) 「眠れる森の大和撫子—仏訳された源氏物語」 (秋山虔監修 『批評集成・源氏物語』 第四巻 ゆまに書房)
- ルネ・シフェール (1999) 「フランス人から見た源氏物語」 (秋山虔監修 『批評集成・源氏物語』 第四巻 ゆまに書房)
- ルネ・ジラル著, 古田幸男訳 (1981) 『欲望の現象学〈ロマンティークの虚偽とロマネスクの真実〉』 (法政大学出版局)
- Murasaki Shikibu. (2001) *THE TALE OF GENJI*. PENGUIN CLASSICS DELUXE EDITION, Translated by ROYALL TYLER, UNABRIDGED.
- Murasaki-shikibu. (2007) *Le Dit du Genji: Genji monogatari*. traduit du japonais par René Sieffert, illustré par la peinture traditionnelle japonaise du XII<sup>e</sup> au XVII<sup>e</sup> siècle, DIANE DE SELLIERS.
- Nankichi Niimi 作/Ken Kuroi 絵/Hélène Morita 訳 (1991) *Le petit renard Gon*. Éditions Grandir.

## 《附記》

本研究は、令和元年度～令和3年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究C）「『深い学び』を目指した高等学校国語科における教材モデルの開発と授業メソッドの提案」（研究課題番号：19K02698 研究代表者：高橋正人）及び同科学研究費助成事業（基盤研究C）「国際的視野から日本文化を理解する力を養う古典教育カリキュラムの研究」（研究課題番号：19K02750 研究代表者：井實充史）の助成に係る研究成果の一部である。

なお、本研究に当たっては、令和元年度及び令和2年度福島大学人間発達文化研究科教職実践専攻（教職大学院）「国語授業の理論と実践」、人間発達文化学類「国語科授業研究」「国語科教育法」「卒業研究演習Ⅰ・Ⅱ」受講者との意見交換に示唆を受けていることを附記し、同講義受講者の皆さんに感謝したい。

(2020年10月8日受理)

## A Study on Deepening Learning Based on Exploring Attitudes in Advanced Classics for Senior High Schools : Related to Eyes, Facial Recognition, French Translation and the Text of Image in “Wakamurasaki” (Young Murasaki) of The Tale of Genji

TAKAHASHI Masato

In response of the announcement of the new designated Course of Study, “clarification of qualities and capability with the aim of cultivation” and “proactive, interactive and authentic learning” are required. High-quality learning, in which discernment and the ability to think by words are operated in practice, is also demanded in Japanese language education for senior high schools.

The goal of this study is to analyze from the viewpoint of catching a glimpse, a type of narration and the problem of eyes as well as facial recognition, centering on “Wakamurasaki (Young Murasaki, vol.5)” in The Tale of Genji as teaching materials of Japanese Language for Senior High Schools, for the purpose of fulfilling deep learning in Advanced Classics of an elective subject. In addition, “Kasanekozo” (the structure of superposition) in the world of literary works is considered through activities to explore by means of comparison with French translation, the text of image and others. Then the ways to develop qualities and capacity for investigating the significance and value of classical literature are examined.